



Title	中世カタロニアの寓話集「獣の書」(試訳)(3)
Author(s)	三原, 幸久
Citation	大阪外国語大学学報. 1981, 52, p. 117-124
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80836
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

《翻 訳》

中世カタロニアの寓話集「獣の書」 (試訳) (3)

三 原 幸 久・訳

Traducción Japonesa del “Llibre de les
Bèsties”, Fabulario Medieval Catalán (3)

Yukihisa Mihara

A continuación de la primera parte y la segunda de mi traducción publicada en el mismo Boletín Núms. 41 y 44, en este artículo están contenidos el último capítulo y un estudio de la comparación de los episodios con las versiones de otros fabularios medievales.

〔第43章〕 7. 狐の死について

狐は王の死をはかることを忘れはしなかったが、宮廷のすべての貴族よりも高い地位を王から与えられたことは忘れていた。ある日、狐は象に今こそ王を殺す時期だ、自分より他には他の顧問官は宮廷にいないから特に実行は簡単だと言った。狐の言葉を長い間考えた象は、王の殺害に同意することに良心の苛責を感じた。しかし、その一方では、狐に従わなかったら狐はこの陰謀を暴露し、自分の死をはかるだろうと恐れた。しかし象は王を殺すことに良心がとがめたので、とうとう、狐に同意しないことに決めた⁽⁹⁰⁾。また一方では、たとえ自分が王になったとしても、狐は王にしたと同じ叛逆を自分に対してするだろうと恐れ、元からの自分の王に叛逆を犯すよりも、自分の生命の危険をおかす方を選んだ。このように考えると、象は、狐が計略によって王を殺そうとするならば、自分もこの計画を王に告発して、計略によって狐を殺すことができるだろうと独り言を言った⁽⁹¹⁾。「もし叛逆が狐の身体のような小さい身体に入るならば、自分のようなずっと大きい身体には忠義と知恵と計略が入るはずだ」と言った。

「象さん、あなたは何を考えていられるのですか。その知識の豊かさと頭の良さを誇る蛇が使者の役目を終えて帰って来る前に、どうしてあなたは王になろうとしないのですか」と狐は言った。象はこれを聞いて、蛇が帰って来るまでに狐に何かするのを待とう、そうして蛇と共に王に味方して狐を殺そうと考えた⁽⁹²⁾。狐は象がその役割をはかばかしく果たそうとしないのを見て、蛇がもどり、象が蛇にこのことを明かさないと恐れ⁽⁹³⁾、象に急いで実行しなさい、そうしな

いと、考えもしなかった結果が起こるでしょうと言った。

象は狐の計略に大そう恐れ、もし自分が王になった時、狐は自分にどうしてほしいのか知りたく思った。すると狐は今の王が自分を遇してくれているのと同様に、狐をただ1人の顧問官に、兎を侍従に、孔雀を門衛にしてくれればよいのだと象に言った。狐がその条件を象に言うと、象は狐にどのようにして王の死をはかるつもりなのかと尋ねた。すると狐は次のように言った。「猪は人格においても力においても王と同等だとうぬぼれています。だから私は猪に王を用心するんだぞ、王はお前を殺そうとしているよと言ってやりましょう。そしてまた王にも、猪は王になりたがっているから猪には用心なさいませと言いましょ。そして王に猪を殺させましょ。そして猪が殺され、王が猪との戦いに疲れている時、象さん、あなたは僅かな力で王に打ち勝ち、かわって王になることができるでしょう」

狐の考えている方法を聞いて、象は狐をだまそうと考え、狐に次のように言った。「証人なき約束は無効です。だから狐さん、あなたが私にしてほしいことの約束、すなわち、あなたがただ1人の顧問官になり、兎を侍従に孔雀を門衛にするという約束に証人を立てましょ。というのも証人がなければ、あなたとの約束を私が拒否した時に、あなたは何の証拠も持たないでしょう。そして、私が王でなく、あなたが王の顧問官である今、私が授けた名誉を、私が王になってから私に強いることはできないでしょう」

狐は象の言葉を長い間考えた。証人が叛逆のことを暴露しないかと恐れたからである。象は狐がたいそう疑い深くなっているのを見て、自分の知っている最良の証人は兎と孔雀で、両方共に狐を恐れている上に、要職につけるのを喜んでおり、決して秘密を暴露するような恐れはないと狐に言った。狐は象のすすめをもっともと考え、兎と孔雀の前で象は狐に約束し、兎と孔雀は象と狐に秘密の厳守を誓った。

この約束の後、象は狐に、先ず最初猪に、王がお前を殺そうとしていると言い、それからその後王に同じことを言いなさいと助言した。狐は最初猪の所に話しに行った。そして狐が猪と話している間に象は王の所へ行き、狐が企てていることをすべて王に告げ、王に叛逆心を持ったことに對し王に赦しを求めた。そして、自分は後悔しており、叛逆して王になるよりも、王の忠実な臣下になっている方を好んでいるとつけ加えた。王は「どうすれば、象よ、お前の言っていることが真実だと確かめることができるのか」と尋ねた。すると象は狐が王の唯一匹の顧問官として残るように仕組み、生まれつき狐を恐れている兎と孔雀を高い地位につけたことによって知ることができますと答えた。「その上に、ライオン様、そのことをより良く証明できることがございます。狐は猪の所に行って、陛下が猪を殺そうとしていると告げております。そのあとで、猪が陛下を殺そうとしていると言いに來ることでしょう。そして狐が言った嘘を猪が本当だと思うように、猪に高慢な顔付きをしていられるようにと助言することができるでしょう」これらの言葉のあとで、象は兎と孔雀が王の殺害に同意したことを知らせた。王はあれほど高い地位につけてたった狐が誤ちと叛逆をはかったことに驚いて次のように言った。「余の父君が言っておられたこと

を聞いたことがある。大きい王国の王であった余の祖父が地位の高い貴族を打ち倒し、身分賤しき動物を高い地位に上げてやったが、その動物の中に高い地位につけてもらった猿がいた。その猿は人間といく分似ているので王になろうとし、感謝をするかわりに祖父に叛逆を企てたのじゃ」「陛下」と象は言った。「小さなコップにたくさんのぶどう酒は入りません。身分低い者には偉大な名誉心も偉大な忠誠心ありません。だから陛下が良き顧問官だと信じておられた狐を殺し、陛下の王国において陛下が絶対であり、神が陛下に血統とその職務の故にお与えになった高貴さを邪悪なる者に屈服させられないようになさるのがよろしゅうございましょう」

こう言ってから、象は、すでに狐が話していた猪の所に行った。そして私は狐がどう言ったかをよく知っていると言った。猪は象がよく知っているのに驚いたので、象はすべての事実を話した。象が猪に話したい間に狐はライオンの所に行き、猪があなたを殺そうとしていると告げた。そこでライオンは狐が叛逆を企てていることを知った。王は自分の前に多くの貴族を集めたが、その中には象、狐、兎、孔雀⁽⁹⁴⁾がいた。全員を前にして王は兎と孔雀に自分が殺された後、狐になされた約束に証人になった件につき真実を白状するよう訊問した。2匹はひどく恐れたが、狐はそれ以上に恐れて次のように王に言った。「国王陛下、私は陛下の貴族が忠実であるかどうかを知るために誘惑してみようと象に言われたようなことを言い、また同じことを猪にも言ったのでございます。しかし、兎と孔雀に対しては、象が私のことを悪く言っているようなことを決して言っておりません」狐は兎も孔雀も自分をたいそう恐れているので、王に自分を告発したり、真実を暴露したりするようなことは決してしないでだろうと信じていたからである。

狐がこう言った時、王は兎と孔雀にとっても恐ろしい顔付きでにらみつけ、大きい唸り声を立てた。それは偉大な威厳から出る自ずからの偉徳が、兎と孔雀の心に、狐の性質がこれら2匹に対して持つ影響力以上の力を与えようとしたのであった。ライオンは大きい唸り声を立てて、恐ろしげに兎と孔雀に真実を申しのべるよう求めた。そこで2匹とも真実を否定することはできず、真実を王に告げた。そこで王は自分自身で狐を殺した。

狐が死ぬとすぐ、王の宮廷は良い状態にもどった。王は象や猪やその他の名誉ある貴族を顧問官とし、兎と孔雀を追放した。

フェリックスはこの「獣の書」を書き終えて1人の国王⁽⁹⁵⁾に捧げた。これは動物達のいとなみの中に、国王がうまく統治する方法、邪悪な顧問官、嘘つきの側近を警戒する方法がいかに現わされているかを見、観察してもらうためであった。

(終)

『獣の書』の中の寓話]

すでに見たように『獣の書』の中に25の挿話が含まれている。再び列举すると次の通りである。

1. 司教の選挙
2. 国王と伯爵の争い

3. イスラム教徒の奴隷
4. 乙女に変身したネズミ
5. 若者とその継母
6. 兎とライオン
7. 蚤としらみと2人の小姓
8. 蛇の害悪
9. 国民に憎まれた王
10. 司教と参事会
11. 国王と隠者
12. 猿と太鼓
13. 鳥と蛇
14. 青鷲とかに
15. 国王と聖人と蛇
16. 熊と鳥と蛇と人間
17. 力と計略の争い
18. 身持ちの悪い妻 〔挿話中の挿話〕 牡牛と狐
19. 別の国王に娘をとつがせようとした国王
20. 金持ちの遺産
21. 王妃の小間使い
22. 狐とはらわた
23. 娘を騎士にとつがせようとした農民
24. 動物の言葉のわかる男 〔挿話中の挿話〕 ろばと雄牛と男
25. おうむと鳥と猿と螢

次にそれぞれの挿話について、起源と思われる類話は次の通りである。

(1) 司教の選挙

訳者は類話を知らない。現実にあったできごとにヒントを得た Llull の創作かも知れない。

(2) 国王と伯爵の争い

この大臣の叛逆をテーマにするこの話も、訳者は類話を知らない。伝承的な話ではなかろう。

(3) イスラム教徒の奴隷

この話は Llull 自身の経験したある事件についての記述だと思われる。Llull のラテン語の作品“Vita Coetanea” 11章によれば、Llull はアラビア語を学ぶためにイスラム教徒の奴隷を買ったが、Llull の不在の時、キリストに対し瀆神的な行為を行ったので、奴隷を殴打した。これを恨んだ奴隷は Llull の暗殺を図ったと伝えられている。

(4) 乙女に変身したネズミ

AT2031C⁽⁹⁶⁾ The man seeks the greatest being as a husband for his daughter として、またわが国では「ネズミ（土竜）の嫁入り」の名称のもとに昔話として知られ、また古典では沙石集 7 巻22話「貧窮を追たる事⁽⁹⁷⁾」（ただし略本系のみ）以来知られている説話であるが、Llull はこれを Calila y Dimna からとったものと思われる。「カリーラ」の第4章にある「少女に変身した二十日ねずみ⁽⁹⁸⁾」の話はモチーフ、構成要素の点では『獣の書』に等しいが、若干物語は詳細で、Llull はやゝ話を簡略化したものと思える。

(5) 若者とその継母

AT870C* Stepmother makes love to stepson あるいは AT875D* The prince's seven wise teacher にあたるもので、欧州・近東に広く分布する「賢人シンドバッド」系または「ローマ七賢人物語」系の枠物語に相当する話である。ただ Llull はこの物語の発端部分だけを、しかも荒筋だけで記しているのも、東方系の写本（この中には同じ13世紀にカスティリア王アルフォンソ十世の弟ファドリケ Fadrique の訳させた『センデバル el Sendebár』が含まれている）か西方系の写本（この場合はフランス語訳された『七賢人物語 Roman des sept sages de Roma』が最も有力な源泉と考えられる）かは判別し難い。

(6) 兎とライオン

AT92 Lion dives for his own reflection にあたる説話で、類似した AT92A Hare as ambassador of the moon と共に Calila y Dimna にあり、Llull はこの話を Calila の「野兎とライオン⁽⁹⁹⁾」からとったものと思われるが、Calila にあったくじ引きで日に1匹ずつの獣がライオンに食べられるに行くことを相談協議する個所は Llull で完全に省かれている。またこの寓話は Roman de Renard の Branche IV にも似た形で存在する。

(7) 蚤としらみと2人の小姓

筆者は愚かな模倣を戒めるこの寓話の類話を他に知らない。あるいは類似した Calila y Dimna の「蚤としらみ⁽¹⁰⁰⁾」の話 (At282C*) にヒントを得たのかも知れない。しかし話の内容と意味は全く変えられてしまっている。

Calila の話は、いつも人間の血を吸っていてもやわらかく刺すので人に気づかれないしらみが、蚤をごちそうに招待する。蚤の激しいかみ方に人間は気づいてシーツを捜す。蚤はいち早く逃げ去っているが、しらみが見つかって殺されてしまうという筋で、友に情をかけると自分が害を受けるというシニックな教訓である。

(8) 蛇の害悪

言うまでもなく旧約・創世記のアダムとイブの挿話からとられたものであろう。

(9) 国民に憎まれた王

Llull の創作した寓話と思われる。Llull はこの個所で悪い王と顧問団に対し、民衆の抵抗権を認めているように思える。

(10) 司教と参事会

これも Llull の創作した寓話と思われる。

(11) 国王と隠者

起源の不明な寓話。Llull は隠者の国政への関与を理想的な政治形態と考えている点で興味深い。Barlaam y Josafat の寓話と若干相い通じる所がある。

(12) 猿と太鼓

Calila y Dimna の「狐と太鼓⁽¹⁰¹⁾」が恐らくは原話であろう。しかし、Calila は、猿ではなく主人公が狐であり、最後に「たぶん、最も無価値な奴がいちばん図体が大きく、いちばん大きい音を出すのではないか」とつぶやく条が残っている。

(13) 鳥と蛇

AT56 The fox through sleight steals the young magpies または AT56A The fox threatens to push down the tree に相当するが、A T に記載する口承説話のモチーフ構成とはかなり異っている。直接的には Calila y Dimna の「鳥とコブラと山犬⁽¹⁰²⁾」がその原語であろう。ただ、Calila では宝石を盗んで蛇を殺させる智慧を山犬に教えられるが、Llull では鳥が自からその智慧を思いつく。また首飾りの所有者はアラビア語の Calila では娼婦、古スペイン語の Calila では所有者の身分職業が記されていないが、Llull では王女となっている。またこの寓話は Roman de Renard の Branche II にも似た形で存在する。

(14) 青鷺とかに

AT231 The heron (crane) transports the fish に相当する話で、Calila y Dimna の「鷺とかに」(アラビア語原本では「鵜とざりがに⁽¹⁰³⁾」) によったものであろう。

(15) 国王と聖人と蛇

旧約聖書から作り上げた寓話で、もちろん蛇の呪われるわけが書かれた創世記第3章によっているものであろう。

(16) 熊と鳥と蛇と人間

AT160 Grateful animals, ungrateful man, 日本では「人間無情」と呼ばれる有名な説話で、民話としてもユーラシア大陸に広く分布する。Llull は直接的には Calila y Dimna の「旅僧と金細工師⁽¹⁰⁴⁾」によったものであろう。しかし、最初穴の中にいたのは、アラビア語版 Calila では金銀細工師・虎・蛇・猿であり、スペイン語訳 Calila では猿と^{クヌグ}狸と蛇と人間であるのに反し、Llull では熊と鳥と人間と蛇で、人間と蛇以外には共通性がなく、この物語の二次的な登場人物であることがわかる。

(17) 力と計略との争い

他に類話はないが、抽象概念を擬人化した中世になかった寓意劇 (moralidades) 風の寓話であろう。

(18) 身持ちの悪い妻

他に類話はない。恐らく Calila y Dimna の「修道僧と狐と娼婦と床屋の妻」(イスパニア語訳では「僧と泥棒⁽¹⁰⁵⁾」) をまとめて作ったものであろう。しかしこの寓話の意味は必ずしも明瞭ではない。

(挿話中の挿話) 牡牛と狐

Calila y Dimna の前述の挿話の冒頭で、僧が布を盗んだ泥棒のあとを追って行った時、途中で見た話として語られる「野山羊の狐」のそっくりそのままの話である。しかし、註62でも書いたように、写本Aのみが主人公が牡牛であり、他の写本、訳本は Calila も共に山羊である。恐らく牡牛は綴字の脱落 boucs → bous によるものであろう。

(19) 別の国王に娘をとつがせようとした国王

他に類話はなく、Llull 自身の作った寓話と考えられる。

(20) 金持ちの遺産

起源不明の寓話。多分 Llull の創作であろう。

(21) 王妃の小間使い

この寓話もなんらかの事実譚にもとづいて Llull が創作した寓話であろう。

(22) 狐とはらわた

この寓話も起源を知らないが、少なくとも伝承的な寓話のように思われる。

(23) 娘を騎士にとつがせようとした農民

この物語のような事実は中世末期の当時には数多くあったものと思われ、これも Llull の見聞した事実譚から創作したものであろう。

(24) 動物の言葉のわかる男

この挿話中にさらに挿入された挿話「ろばと雄牛と男」を含めて、全体が AT670 The animal languages に相当し、全世界に民話として分布する有名な物語である。これは Calila y Dimna にはなく『千夜一夜物語』にあるもので、ほとんどのアラビア語の写本か西欧諸語への訳本には冒頭の部分に、「牡牛とろばの話⁽¹⁰⁶⁾」として含まれている。ただ『千夜一夜』の物語はかなり詳細に物語が語られ、また主人公は「大金持ちの商人」となっているが、Llull はこれを農夫にかえ、また大巾に物語を短かくしている。なおこの話型については、Antti Aarne がすでに1914年 Der tiersprachenkundige Mann und seine neugierige Frau (動物の言葉の解る男と好奇心の強い女房) と題する比較研究の研究書が出ており、わが国においても、昭和12年に「鳥言葉の昔話」という題の柳田国男の論文が「昔話研究」2巻9号誌上に載っており、昔話の比較研究の上で意義深い物語である。

(25) おうむと鳥と猿と螢

Calila y Dimna の「猿と螢」(イスパニア語訳「螢の話⁽¹⁰⁷⁾」) から来たものと思えるが、Calila では登場動物が猿と螢と鳥の3匹であるが、Llull は鳥をおうむにし、さらにおうむのおせっかいをたしなめる鳥をつけ加えている。

以上全体的に言えることは圧倒的に Calila y Dimna から来たものが多く、Roman de Renard に類話のある話もすべて Calila にも類話があり、しかも Calila の方が話の構成要素ははるかに酷似している。その意味で冒頭に述べたように Roman de Renard との類似はほとんど主人公の名称のみであり、寓話の大部分はこれを Calila y Dimna から得たものと言わなければならない。しかし、その場合も、逐語的な引用はほとんどされていず、要約の形で Llull 自身の言葉にして挿入されたと言うことができるだろう。

〈注〉

- (90) この1節はイスパニア語訳にはない。
- (91) イスパニア語訳では、この1節は簡単に、「そうして手くだと計略を用いて狐の死をはかる方がよいと思った」となっている。
- (92) この1節はイスパニア語訳にはない。
- (93) この1節はイスパニア語訳にはない。
- (94) イスパニア語訳、フランス語訳にはここに猪も含まれている。
- (95) 多分フランスのフィリップ4世美貌王(1253~1314)だと考えられている。
- (96) 以下A Tは Antti Aarne & Stith Thompson: The Types of the Folktale, Helsinki, 1962 に掲載する話型番号で、国際的に昔話を比較研究する際に用いられる。
- (97) 岩波書店発行・日本古典文学大系「沙石集」p. 499
- (98) イスパニア語訳については Biblioteca de Autores Españoles Vol. LI (以下BAEと略す) p. 52、アラビア語訳については平凡社刊・東洋文庫331『カリラとディムナ』pp. 191-192
- (99) BAE p. 25, 東洋文庫 pp. 70-71
- (100) BAE p. 27, 東洋文庫 pp. 76-77
- (101) BAE p. 22, 東洋文庫 p. 57
- (102) BAE pp. 24, 25, 東洋文庫 pp. 67-68, 69
- (103) BAE pp. 24-25, 東洋文庫 pp. 67-69
- (104) BAE pp. 70-71, 東洋文庫 pp. 280-284
- (105) BAE pp. 23-24, 東洋文庫 pp. 62-65
- (106) 最も入手し易い日本語訳として、『バートン版 千夜一夜物語』第1巻(大場正史訳・角川文庫版) pp. 58-68
- (107) BAE p. 32, 東洋文庫 p. 98